

☒ 話すこと ☐ 書くこと☐ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☐ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☐ 課外活動での活用☐ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AI等のデジタル技術の活用と遠隔交流学习の組み合わせによる言語活動の充実

実証概要

<校数>8校(中学校:5校、義務教育学校1校、特別支援学校2校) <人数>989名

<学年>中学校:第1～第3学年 ※学校規模により、第2・第3学年のみの学校あり <アプリ等>ジョイズ株式会社 Terra Talk

<AI機能について>

様々な目的や場面に応じて双方向のやり取りが可能であり、生徒の発話に対して発音、流暢さ、表現面のフィードバックを行うとともに、個々の学習状況に応じた学習コンテンツを提供することができる。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AI英語アプリとデジタル教科書、Teams等を効果的に組み合わせた実践

AI英語アプリによる対話練習と即時フィードバックにより、発音、文法、質問応答の改善が見られた。また、デジタル教科書での読解やTeamsで考えを共有する活動を組み合わせ、AI英語アプリで得たスキルを実際のやり取りに活用した結果、授業内の英語発話量が増え、言い換えや聞き返しなどのコミュニケーションも広がった。さらに、AIの指摘を踏まえて次の発話を修正する姿が見られ、語彙の増加や文の質的向上にもつながった。

●AIスピーキングテストで見た生徒の変化と改善への支援

AIキャラクターとの対話により、生徒は本当に人と会話しているような感覚をもち、問いにどう答えるかを考えながら取り組む様子が見られた。語彙を豊かにして、言い回しを工夫し、発話への積極性も高まった。テスト後は、教師が結果を生徒に説明し、課題を自覚させるとともに、表現や伝え方に関する助言を行い、改善の方向性を示した。今後は、助言を踏まえ主体的に学習を重ね、表現力の向上を目指す。

●遠隔交流学习による「使う必然性」の創出

国内外の学校との遠隔交流学习を設定し、教室内で学んだ表現や考えを実際の相手に伝え、学んだ英語を運用しなければならない状況を作り出した。自分の英語が通じなければ、再度AI等を活用して、反復練習を行った。

実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

①生徒の英語力の変化

AIの活用により、発話量や流暢さ、文法、語彙など生徒の英語力が総合的に向上した。即時フィードバックを基に課題を改善する学びが循環し、他技能にも波及し、GTECでも得点が向上した。

【GTEC4技能確認テスト(平均得点)】

	READ ING	LISTEN ING	WRIT ING	SPEAK ING	TOTAL
2024	109.5	109.9	165.0	118.9	503.3
2025	115.3	115.6	167.8	120.0	518.7

②生徒の関心・意欲の変化

AIの活用により、自分自身の課題把握と自己分析が進み、主体的な学び方へ変容した。反復練習で得た自信は対人でのコミュニケーションにも広がり、相手を意識したやり取りが増加した。

生徒へのアンケート調査より	1年目	2年目
AI学習が対人コミュニケーションに良い影響を与えた	62.4%	79.3%
達成度の把握と自己分析ができた	58.4%	74.4%
話すことへの自信が付き発話量が増加した	54.2%	68.3%

③教師の指導の変化

AIの活用により、生徒は自分のペースで「聞く・話す」の反復練習と即時フィードバックをとおした課題の把握ができるようになった。そのため教師は、生徒のつまづきにに応じた個別支援を行うとともに、AIで習得した表現を対人でのコミュニケーションにつなげる言語活動を設定するなど、実際の使用場面を見据えた指導に重点的に取り組むことができるようになった。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●自校から地域へ、AIで広がる英語教育の未来

授業研究会において外部有識者を招聘したり、AI英語活用リーダー同士の知見共有の場を設定したりすることで、リーダーとしての資質・能力の向上を図った。AIの効果的な活用を推進するため、AI英語活用リーダーが府内のある市の英語研修会で講師を務め、具体的な活用事例や授業での工夫を紹介した。また、研修後には各校から寄せられる課題や疑問に対して助言を行い、現場での実践を支援した。AI英語活用リーダーの育成と普及活動を一体的に進めたことで、自校のみならず地域全体でAIを活用した英語教育の理解と実践が広がり、英語力向上に向けた新たな授業づくりを提案した。さらに、こうした活動を通じて、教員間の情報共有やネットワーク形成が進み、AI活用の定着に向けた協働体制の構築にもつながった。

事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

生徒はAIの活用により、発話への自信を高め、フィードバック等による自分自身の学びを振り返り、新たな目標を立てる「学習サイクル」の確立につながった。さらに、リーダー育成を通じて地域全体でAI活用の理解と実践が広がった。

AI活用は定着途上であり、教員間の活用格差が課題である。加えて、AI練習の成果を対人とのコミュニケーションに効果的に結び付ける指導の工夫が求められる。

今後は、研修会や資料提供を通じて実践事例や活用モデルを共有し、教員の活用格差の解消を図る。